中国語の動量詞と時量詞

小　川　郁　夫

1．はじめに
2．補語
3．賓語
4．名量詞との違い
5．動量詞
6．時量詞
7．おわりに

1．はじめに

〔1〕　去一次（1度行く）
〔2〕　学一年（1年学ぶ）

上の“一次”は動詞“去”の回数を，“一年”は動詞“学”の期間を表している。前者は動量詞，後者は時量詞と呼ばれる。現行の中国語文法では，これらの動量詞，時量詞を補語とするものと賓語とするものの2通りが行われているが，補語とするものが主流である。いわゆる学校文法でも補語としての説明が採用されている。

それに対し，次の“一本”は誰もが認める賓語である。“一本”は名量詞であり，動詞“买”の直接の対象であるからである。

〔3〕　买一本（1冊買う）

本稿では，〔1〕〔2〕の“一次”“一年”を〔3〕の“一本”と同様に賓語とすることについて述べ，動量詞，時量詞を含む文についての構文的分析を行う。

2．補語

動詞の後に置かれた動量詞と時量詞が賓語であることを述べるために，ここではまず簡単に中国語の補語について見ていく。

朱德熙1982では，補語について「結果補語」「方向補語[1]」「“到”を用いる補語」「可能補語」「状態補語」「程度補語」に分けている[2]が，これらは文法形式から見ると，朱德熙1985にあるように大きく3つに分けられる[3]。即ち，1つは“写完”（書き終える）“洗干净”（きれいに洗う）“拿出”（持ち出す）などのように，動詞や形容詞が動詞に直接結合したもので，「結果補語」「方向補語」「“到”を用いる補語」「程度補語」がこれに当たる。2つめは“写得完”（書き終えられる）“写不完”（書き終えられない）のように“得”“不”を用いるもので，「可能補語」がこれに当たる。3つめは“写得很好”（書き方がとてもよい）“写得不好”（書き方がよくない）のように必ず“得”を伴うもので，「状態補語」がこれに当たる。そして，最初の1類は後の2つの類とは無関係ではなく，次のような変換が可能なものが多い。

写完　⟶　写得完，写不完（可能補語）
洗干净⟶　洗得干净，洗不干净（可能補語）
　　⟶　洗得很干净（状態補語）

朱1982，1985の補語は“得”“不”を用いるものと，“得”を用いる形に変換できるものという明確な文法形式を持っている。

筆者は補語について「結果補語」「方向補語」「可能補語」「状態補語」の4つに分けることができると考えている。朱1982の言う「“到”を用いる補語」については別に検討を要するが，概ね「結果補語」に入れること

ができそうである。また，朱1982は「程度補語」として“好极了”（実によい）“暖和多了”（ずっと暖かい）の“极”“多”などを挙げているが，これらは形式的には「結果補語」と同じで，「結果補語」の特殊なものとして扱えばよいと思われる。“极”を用いるものでは不可能だが，“多”を用いるものでは「状態補語」への変換が可能である。

暖和多了 ⟶ 暖和得多（状態補語(4)）

いずれにせよ，“去一次”“学一年”の“一次”“一年”などの動量詞，時量詞を補語に入れるとすると，「動詞に直接結合した」補語ということになるが，これらでは「可能補語」や「状態補語」への変換は全く不可能である。つまり，動量詞，時量詞は上に挙げた一般に補語とされているものと文法的共通点を持っていない。筆者が動量詞，時量詞を補語としない理由の１つはこの点である。

しかし，動詞の後に置かれた動量詞，時量詞を補語とする文法書は多い(5)。例えば，刘月华、潘文娱、故桦1983は補語について，賓語と比較しつつ次のように述べている(6)。

> 补语是位于动词或形容词后主要对动词或形容词进行补充说明的成分。虽然宾语也位于动词后，但宾语与补语的区别是明显的：宾语一般表示动作涉及的对象，因而大多数是名词性的；补语主要是对动作加以补充说明，因而除数量补语外，大多数是非名词性的。（補語は動詞又は形容詞の後に置かれ，主に動詞又は形容詞に対して補充説明をする成分である。賓語も動詞の後に置かれるが，賓語と補語の違いははっきりしている。賓語は一般に動作の及ぶ対象を表すので，殆どが名詞性である。補語は主に動作に対して補充説明を加えるので，数量補語を除けば殆どが非名詞性である）

ここで言う「数量補語」とは本稿で扱っている動量詞，時量詞などを指す。刘等1983は，賓語は名詞性，補語は非名詞性であり，「賓語と補語の違いははっきりしている」としながら，補語は「数量補語を除けば殆どが

非名詞性である」と述べて，「数量補語」の補語としての特異性を認めているのである。

3．賓語

以上，動詞の後に置かれた動量詞，時量詞が一般に補語とされるものと文法的な共通点を持たないことについて見てきた。以下では，これらの語が賓語としての文法的性質を持っているかどうかについて見ていく。

動詞の後に置かれた動量詞，時量詞を賓語だとする文法書は多くないが，例えば丁声树等1961，朱1982，马真1988(7)などがある。

このうち，马1988の説明が明快で分かりやすい。

〔4〕　写一篇（1編を書く）

〔5〕　写一回（1回書く）

〔6〕　写一天（1日書く(8)）

〔4〕の“一篇”は名量詞であり，誰もが認める賓語である。〔5〕の“一回”は動量詞，〔6〕の“一天”は時量詞であるが，马1988は次のような理由で，〔4〕〔5〕〔6〕は同じ文法構造であり，“一回”“一天”も“一篇”同様，動詞“写”の賓語であるとしている(9)。

動詞の後に“了”を置くことができる。

〔7〕　写了一篇（1編を書いた）

〔8〕　写了一回（1回書いた）

〔9〕　写了一天（1日書いた）

動詞の後に“过”を置くことができる。

〔10〕　写过一篇（1編を書いたことがある）

〔11〕　写过一回（1回書いたことがある）

〔12〕　写过一天（1日書いたことがある）

名量詞，動量詞，時量詞の後に名詞を置くことができる。

〔13〕　写一篇评论（1編の評論を書く）

〔14〕　写一回评论（評論を１回書く）

〔15〕　写一天评论（評論を１日書く）

名量詞，動量詞，時量詞を文頭に出して，同じ構文を作ることができる。

〔16〕　一篇也没有写（１編も書かなかった）

〔17〕　一回也没有写（１回も書かなかった）

〔18〕　一天也没有写（１日も書かなかった）

動詞の後の名量詞を誰もが賓語と認めるのは，名量詞が動詞の直接の対象だからである。名量詞“一篇”には，明示されていなくても“一篇评论”“一篇文章”などの意味が含まれている。一方，“一回”“一天”は動詞の直接の対象ではなく，動詞の表す動作行為の回数や期間を表している。しかし，文法形式として，上に挙げたような共通点がある以上，〔４〕〔５〕〔６〕の“一篇”“一回”“一天”は同じ文法成分と考えざるを得ない。動詞の後の動量詞，時量詞を賓語ではなく，補語とするのは動詞との意味関係に引きづられているのである。やはり，これらは賓語と考えるべきであろう。朱1985にも次のようにある(10)。

> 把这一类格式放到述补结构里去的唯一的理由是说：后头的表示动量和时量的词语在意义上是补充前边的动词的。（この類の形式を「述語＋補語」構造に入れる唯一の理由は，後の動作量と時間量を表す語が意味の上で前の動詞を補っていることである）

上にある「この類の形式」とは「動詞＋動量詞」「動詞＋時量詞」を指すが，朱1985は，文法構造から考えて，これらの動量詞，時量詞は補語ではなく，賓語であると述べている。

４．名量詞との違い

次の例は，名量詞，動量詞，時量詞の後に名詞を伴ったものである。３に挙げた马1988の〔13〕〔14〕〔15〕に相当する例である。

〔19〕　买一本书（1冊の本を買う）

〔20〕　去一次中国（中国に1度行く）

〔21〕　学一年汉语（中国語を1年学ぶ）

〔19〕の名量詞“一本”は後の名詞“书”を修飾している。つまり“一本”は“书”の定語である。名詞を修飾することが名量詞の主要な機能である。“本”は本などの冊数を数える量詞で，単に“一本”とだけ言っても，“一本书”“一本杂志”などの意味が含まれている。“买一本”の“一本”を誰もが賓語と認める所以である。

〔19〕〔20〕〔21〕がすべて同じ文法構造であるとすれば，〔20〕〔21〕の動量詞“一次”，時量詞“一年”も後の名詞“中国”“汉语”の定語ということになるが，果たしてそうなのだろうか。3で検討したように，動詞の後に置かれている名量詞，動量詞，時量詞はすべて賓語と考えるのが適当であるが，動量詞と時量詞が名量詞と同様，名詞の定語となれるかどうかは，また別の問題である。

朱1982は，〔19〕〔20〕〔21〕において次のような変換が可能なことを根拠にして，〔19〕の“一本”同様，〔20〕〔21〕の“一次”“一年”も“中国”“汉语”の定語であるとしている(11)。

〔22〕　一本书也没买（1冊の本も買わなかった）

〔23〕　一次中国也没去（1度の中国も行かなかった）

〔24〕　一年汉语也没学（1年の中国語も学ばなかった）

確かに，〔23〕〔24〕の“一次”“一年”は“中国”“汉语”の定語であると考えざるを得ない。構造的に見て，次の分析法以外あり得ないからである。

一本书／也没买

一次中国／也没去

一年汉语／也没学

従って〔20〕〔21〕の“一次”“一年”も“中国”“汉语”の定語である場合は必ずあるはずである。この場合には〔20〕〔21〕は〔19〕と同様，次

のように分析される。

买／一本书

去／一次中国

学／一年汉语

“去／一次中国”では不可能だが，“学／一年汉语”では“的”を加えて“学／一年的汉语”のように言うこともできる。“的”は“一年”が“汉语”の定語であることの標識となっている。

しかし，〔19〕と〔20〕〔21〕の変換では次のような違いも存在する。

〔25〕＊买书一本[12]

〔26〕　去中国一次（中国に1度行く）

〔27〕　学汉语一年（中国語を1年学ぶ）

〔28〕＊一本也没买书

〔29〕　一次也没去中国（1度も中国に行かなかった）

〔30〕　一年也没学汉语（1年も中国語を学ばなかった）

また，次のような問いに対する答えでも違いが現れる。

〔31〕　你买了几本书？（あなたは何冊の本を買いましたか）

〔31〕'　一本。（1冊）

〔31〕"　一本书。（1冊の本）

〔32〕　你去了几次中国？（あなたは中国に何度行きましたか）

〔32〕'　一次。（1度）

〔32〕"＊一次中国。

〔33〕　你学了几年汉语？（あなたは中国語を何年学びましたか）

〔33〕'　一年。（1年）

〔33〕"＊一年汉语。

〔25〕〔28〕においては，名量詞とその後の名詞は切り離すことができない。それに対し，〔26〕〔27〕〔29〕〔30〕からは，動量詞，時量詞とその後の名詞は自由に切り離すことができることが分かる。また，〔31〕"の“书”は情報としては不必要であるが，現れても一向に差し支えない。し

かし，〔32〕”の“中国”，〔33〕”の“汉语”は現れると不成立，もしくは極めて不自然である。以上のことから，“一本”と“书”の結合力は強いが，“一次”と“中国”，“一年”と“汉语”の結合力は弱いことが分かる。

“一次”“一年”がそれぞれ“去”“学”の賓語であり，かつ“一次”と“中国”，“一年”と“汉语”の結合力が弱いことから，〔20〕〔21〕は次のような分析も可能なのではないだろうか。

去一次／中国

学一年／汉语

いや，〔32〕”〔33〕”が成立しないことから考えて，一般にはむしろ上のような分析の方が自然に思われる。

次にもっと明瞭な例を挙げる。

〔34〕　我看过一次这个电影。（私はこの映画を1度見たことがある）

〔35〕　我们研究了一年怎样教留学生最合适。（私たちはどのように留学生を教えたら最適かを1年検討した）

上例では次のような変換は不可能である。

〔36〕＊一次这个电影也没看过。

〔37〕＊一年怎样教留学生最合适也没研究。

〔34〕の“这个电影”は指示詞“这个”を伴った名詞句である。また，〔35〕の“怎样教留学生最合适”はそれだけで文となり得るものである。〔36〕〔37〕が不成立であることから，“一次”“一年”が“这个电影”“怎样教留学生最合适”の定語となり得ないことが分かる。〔34〕〔35〕の述部もやはり次のように分析すべきである。

看过一次／这个电影

研究了一年／怎样教留学生最合适

これらは「動詞＋動量詞」「動詞＋時量詞」全体が賓語を取っており，動量詞と時量詞自身も動詞の賓語であるから，いわゆる「二重賓語文」と考えられる。

5．動量詞

1つの文の中に動量詞と賓語が同時に現れる場合，その語順については一般に次のようなことが言われている。

① 賓語が普通名詞の場合，「動詞＋動量詞＋賓語」となる。

② 賓語が代詞の場合，「動詞＋賓語＋動量詞」となる。

③ 賓語が人名，地名の場合，①②の2通りの語順が可能。

これらの規則の文法的根拠を示すことは極めて難しいように思われる。また，②に合わない“我去过一次那儿”を成立すると言う中国人も存在する。これらの文法的根拠については今後の課題とし，ここでは誰もが成立すると見なす例の文法構造を検討していくことにする。

〔38〕 我看过一次电影。（私は1度映画を見たことがある）

〔39〕 我买过一次东西。（私は1度買い物をしたことがある）

〔40〕 我见过他一次。（私は彼に1度会ったことがある）

〔41〕 我去过那儿一次。（私はそこに1度行ったことがある）

〔42〕 我见过一次李先生。（私は李さんに1度会ったことがある）

〔43〕 我见过李先生一次。（〔42〕に同じ）

〔44〕 我去过一次中国。（私は中国に1度行ったことがある）

〔45〕 我去过中国一次。（〔44〕に同じ）

これらの例文はすべて上に挙げた①②③の語順に合致している。〔38〕〔39〕が①の例，〔40〕〔41〕が②の例，そして〔42〕～〔45〕が③の例である。以上の例文の述部を4で述べたことに基づき分析していく。

〔38〕〔39〕では次のような変換が可能である。

〔46〕 一次电影也没看过。（1度の映画も見たことがない）

〔47〕 一次东西也没买过。（1度の買い物もしたことがない）

〔46〕〔47〕の“一次”は“电影”“东西”の定語となっている。従って，〔38〕〔39〕の述部は次のような分析が可能である。

看过／一次电影

买过／一次东西

しかし，4で述べたように，〔38〕〔39〕は「二重賓語文」として次のようにも分析できる。一般にはこの分析の方が自然である。

看过一次／电影

买过一次／东西

“电影”“东西”が“这个”“那个”などの指示詞を伴うと，「二重賓語文」としての分析はより明瞭なものとなる。“一次”が“这个电影”“那个东西”の定語とはなり得ないからである。

看过一次／这个电影

买过一次／那个东西

〔40〕〔41〕は間違いなく「二重賓語文」として次のように分析される。

见过他／一次

去过那儿／一次

〔42〕〔43〕において次のような変換の成立，不成立を見ると，“一次”は人名の定語とはならないことが分かる。

〔48〕＊一次李先生也没见过。

〔49〕　一次也没见过李先生。（1度も李さんに会ったことがない）

〔42〕〔43〕はともに「二重賓語文」として次のように分析される。

见过一次／李先生

见过李先生／一次

〔44〕が次のような2通りに分析されることについては既に4で述べた。また，後者の分析の方がより自然であることについても述べた。

去过／一次中国

去过一次／中国

前者の分析が可能であることから，“一次”は地名（国名）の定語にはなり得ることが分かる。

〔45〕は間違いなく「二重賓語文」として次のように分析される。

去过中国／一次

6．時量詞

ここでは1つの文の中に時量詞と賓語が同時に現れる場合について見ていく。

〔50〕　我学了一年汉语。(私は中国語を1年学んだ)

〔51〕　我看了一个小时电视。(私はテレビを1時間見た)

上の例は5で挙げた①に対応する「動詞＋時量詞＋賓語」という語順になっている。これらの述部は次のような2通りに分析される。このことについては既に4で述べた。

学了／一年汉语

学了一年／汉语

看了／一个小时电视

看了一个小时／电视

それぞれの前者は時量詞“一年”“一个小时”が“汉语”“电视”の定語となっている場合の分析で，後者は「二重賓語文」としての分析である。後者の分析の方がより自然であることについても既に述べた。

賓語が代詞の場合の語順は「動詞＋賓語＋時量詞」となる。これは5で挙げた②に対応する。

〔52〕　我等你一会儿。(私はあなたをしばらく待つ)

〔53〕　我等了他三年。(私は彼を3年待った)

〔52〕〔53〕の述部は間違いなく「二重賓語文」として次のように分析される。

等你／一会儿

等了他／三年

賓語が人名の場合は，「動詞＋時量詞＋賓語」と「動詞＋賓語＋時量詞」の2通りの語順が可能である。これは5で挙げた③に対応する。

〔54〕　我等一会儿小李。(私は李さんをしばらく待つ)

〔55〕　我等小李一会儿。(〔54〕に同じ)

“一会儿小李”は成立しない。“一会儿”は人名の定語とはならない。

〔54〕〔55〕はともに「二重賓語文」として次のように分析される。

等一会儿／小李

等小李／一会儿

実は,〔54〕〔55〕はともに次のように変換することはできない。

〔56〕＊一会儿小李也没有等。

〔57〕＊一会儿也没有等小李。

〔57〕が成立しないのは,“一会儿”には“一”が含まれているが「しばらく」という時間的幅を持った語で,「少しも……しない」という表現に合わないからであろう。

次の例を見てみよう。

〔58〕　我学汉语一年了。(私は中国語を学んで1年になった)

〔59〕　我来北京一年了。(私は北京に来て1年になった)

これらの述部の語順は「動詞＋賓語＋時量詞」となっているが,賓語は代詞ではない。つまり,5で挙げた②の条件を満たしていない。また,“北京”は地名であるが,“汉语”は普通名詞である。つまり,〔58〕は③の条件を満たしていない。

〔58〕と次の例文ではどのような違いがあるのだろうか。

〔60〕　我学了一年汉语。(私は中国語を1年学んだ)

〔61〕　我学了一年汉语了。(私は〔今までに〕中国語を1年学んだ)

〔60〕は既に取り上げた例文で,述部は「動詞＋時量詞＋賓語」となっている。この“学了一年汉语”は「中国語を学ぶという動作行為を1年間持続させた」という意味を表している。〔61〕は文末にもう1つ“了”が付いているが,この“了”は“学了一年汉语／了”のように述部全体に付いているのであり,「現在まで,中国語を学ぶという動作行為を1年間持続させた」という意味を表している。

それに対し,〔58〕は「中国語を学び始めて1年が経過した」という意

味である。また，〔59〕も同様，「北京に来てから1年が経過した」という意味を表す。〔58〕〔59〕の“一年”は動作行為の持続した期間を表しているのではなく，動作行為の開始後，又は完了後から現在までに経過した期間を表しているのである。〔59〕において次のような変換が成立しないのは，「来る」という動作行為は一瞬にして完了するものであり，持続性を持たないからである。

〔62〕＊我来了一年北京。

〔63〕＊我来了一年北京了。

〔58〕〔59〕の“一年”はどのように扱えばよいのだろうか。刘等1983はこのような“一年”も補語だとしている(13)。本稿では動詞の後に置かれた時量詞を補語としない立場を取っているが，それではこれらの“一年”は賓語なのだろうか。

「中国語を1年学んだ」「中国語を1年学んだことがある」と言う場合には“学汉语一年”を用いることはできない。

〔64〕＊我学了汉语一年。

〔65〕＊我学过汉语一年。

“学汉语一年”“来北京一年”は末尾に“了”を添えて〔58〕〔59〕のような文を作ることができる他，次のような文を作ることができる。

〔66〕　我学汉语已经一年了。（私は中国語を学んで既に1年になった）

〔67〕　我来北京已经一年了。（私は北京に来て既に1年になった）

〔68〕　我学汉语快一年了。（私は中国語を学んでもうすぐ1年になる）

〔69〕　我来北京快一年了。（私は北京に来てもうすぐ1年になる）

〔70〕　我学汉语还不到一年。（私は中国語を学んでまだ1年にならない）

〔71〕　我来北京还不到一年。（私は北京に来てまだ1年にならない）

上の“已经一年了”“快一年了”“还不到一年”はこれだけで1つの述部となり得る。〔66〕〜〔71〕は2つの述部からなる「連述構造(14)」の文である。例えば〔66〕〔67〕の述部は次のように分析される。

学汉语／已经一年了

来北京／已经一年了

“学汉语”“来北京”と“已经一年了”は「動詞＋賓語」構造ではなく，2つの述部からなる「連述構造」である。同様に，〔58〕〔59〕の述部も「連述構造」として次のように分析される。

学汉语／一年了

来北京／一年了

“一年了”は「1年になった」という意味で1つの述部になり得る。

次の例も「連述構造」の文である。

〔72〕　我们结婚十年了。(私たちは結婚して10年になった)

〔73〕　我大学毕业三年了。(私は大学を卒業して3年になった)

“结婚”“毕业”はこれで1つの動詞とされているが，どちらも「“结”＋“婚”」「“毕”＋“业”」のように「動詞＋賓語」から構成されている。また，意味的にも一瞬にして動作行為が完了し，持続性を持たない。

结婚／十年了

大学毕业／三年了

7．おわりに

以上，動量詞，時量詞を含む文についての構文的分析を行ってきた。本稿では，動量詞，時量詞を殆どの場合，賓語としたが，ただ6の最後に述べたように「動詞＋賓語＋時量詞」のあるものは「連述構造」として分析した。ここでは「連述構造」として分析される文についての若干の補足を加え，また数量賓語と呼ばれるものについての私見を述べる。

6で「動詞＋賓語＋時量詞」のあるものを「連述構造」として分析したが，次の例では賓語がなく，「動詞＋時量詞」となっている。

〔74〕　他死了十年了。(彼が死んで10年になった)

〔75〕　他离开了五天了。(彼が去って5日になった)

動詞“死”“离开”は一瞬にして動作行為が完了し，持続性を持たない。これらもやはり「連述構造」の文ととらえるべきであって，“十年”“五天”は動詞“死〔了〕”“离开〔了〕”の賓語ではない(15)。

次の例は二義性を持つ。

〔76〕 他走了五天了。(彼が去って5日になった，彼は5日間歩き続けた)

〔77〕 我看了一年了。(私が見てから1年になった，私は1年間見続けた)

〔76〕の“走”が“离开”と同じ意味で使われている場合には，「彼が去ってから5日が経過した」という意味になり，〔76〕は「連述構造」となる。しかし，“走”には「歩く」という持続性を持つ動詞としての用法もある。この場合には“五天”は動詞“走〔了〕”の賓語となる。

〔77〕の“看”は持続性を持つ動詞だから一般には「1年間見続けた」の意味になりそうであるが，「見終わってから10年が経過した」という意味も表し得る。次の例ではその違いがはっきり現れている(16)。

〔78〕 这本书看了一年了，记得不太清楚。(この本は見てから1年たったので，余りはっきりと覚えていない)

〔79〕 这本书看了一年了，还没看完。(この本は1年間読み続けているが，まだ読み終わっていない)

“看了一年了”は，〔78〕の意味の場合は「連述構造」であり，〔79〕の意味の場合は“一年”は動詞“看〔了〕”の賓語となる。

また，朱1982では，次のように形容詞の後に置かれた“一点儿”“一百倍”などを数量賓語と呼んでいる(17)。

〔80〕 轻一点儿 (ちょっと軽い)

〔81〕 好一百倍 (100倍いい)

刘等1983は，これら形容詞の後に置かれた名量詞も補語だとして次のように述べている(18)。

比较数量补语是指用在形容词后表示比较的结果的补语。数量补

语由名量词充任。……动词后的名量词是宾语，不是补语。（比較数量補語とは形容詞の後に用いられて比較の結果を表す補語を指す。数量補語になるのは名量詞である。……動詞の後の名量詞は賓語であって，補語ではない）

「動詞の後の名量詞は賓語であって，補語ではない」という一文には何ら問題がない。これは誰もが認めることである。しかし，刘等1983が「動詞＋賓語」として挙げる次の〔82〕と，形容詞“多”を用いた〔83〕にはどのような構文上の違いがあると言うのだろう。

〔82〕　增加了一百名。（100名増えた）

〔83〕　多了一百名。（100名増えた）

形容詞の後に置かれたこれらの語もすべて賓語と考えるのが妥当であろう。また，次の例の“一个”“两个”も，述語的性質を持った語句の後に置かれた名量詞であり，かつ賓語以外の成分とする理由が見つからないので，賓語とすべきではないかと，筆者は今のところ考えている。

〔84〕　多少钱一个？（１ついくらですか）

〔85〕　三块钱两个。（２つ３元です）

注

（１）原文は“趋向补语”。

（２）126～138頁。

（３）49～51頁。

（４）意味的には“暖和得多”も「程度」を表している。

（５）例えば，张静1980，胡裕树1981，刘月华、潘文娱、故铧1983，徐枢1985，黄伯荣、廖序东1985など。

（６）329頁。

（７）実は同書に先立つ马真1981では補語として扱われている。このことからも動量詞，時量詞の文法的扱いの難しさがうかがえる。

（８）日本語では「１回を書く」「１日を書く」とは余り言わない。日本語訳は

あくまでも参考のために添えたものであり，中国語の文法構造とは関係がない。その他の例についても同様。また，敢えて不自然な日本語訳を添えた例もある。

（9）62頁。

（10）51頁。

（11）51頁及び117頁。ただし，例文は異なる。

（12）＊を施した例は成立しないことや，分析が誤っていることを示す。

（13）382～383頁。

（14）1つの主語に対して複数の動詞〔句〕が連用される文を一般に，連動式文と呼ぶが，ここでは“已经一年了”などが動詞〔句〕ではないので，朱1982の“连谓结构”を「連述構造」と訳して使用した。

（15）このような分析法については，ごく簡単にではあるが，刘勋宁1988に見られる。

（16）この意味の違いについての指摘は陈平1988にもある。

（17）116頁。

（18）384頁。

引用文献

朱德熙1982《语法讲义》，商务印书馆。

朱德熙1985《语法答问》，商务印书馆。

刘月华、潘文娱、故铧1983《实用现代汉语语法》，外语教学与研究出版社。

丁声树等1961《现代汉语语法讲话》，商务印书馆。

马真1988《简明实用汉语语法》修订本，北京大学出版社。

张静1980《新编现代汉语》，上海教育出版社。

胡裕树1981《现代汉语》增订本，上海教育出版社。

徐枢1985《宾语和补语》，黑龙江人民出版社。

黄伯荣、廖序东1985《现代汉语》修订本，下册，甘肃人民出版社。

马真1981《简明实用汉语语法》，北京大学出版社。

刘勋宁1988〈现代汉语词尾“了”的语法意义〉，《中国语文》1988，5。

陈平1988〈论现代汉语时间系统的三元结构〉，《中国语文》1988，6。